

## ●質問の答え

質問をいただいた皆様へ

平日対応できず、1週間もお待たせして申し訳ありませんでした。

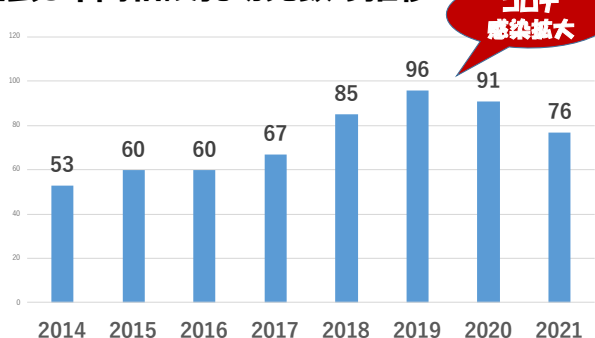
### 質問1 現在の乳幼児教育相談の課題と、その解決策を教えてくださいと思います。

乳幼児教育相談の課題は各校で様々と思います。都立葛飾ろう学校の乳幼児相談での課題とその解決法についてお答えしたいと思います。

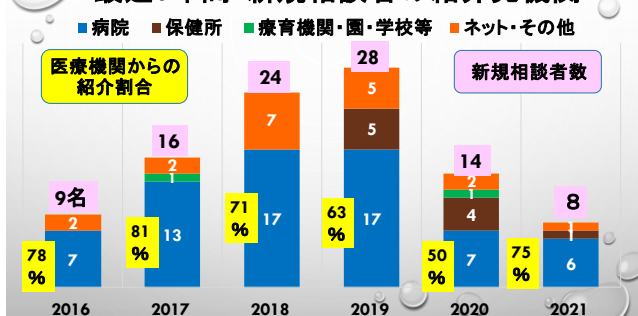
#### ① 医療機関との連携

都立葛飾ろう学校の、定期的に通学してきた乳幼児数の年度末人数の推移は下記の表にある通りです。2019年度以降減少傾向にあり、特に新規の相談者数の減少が顕著です。都立葛飾ろう学校の0歳児は現在一側性難聴児1名だけです。1,2歳児についても幼稚部入学が適正入学と考えられるお子さんが2,3名と非常に少ない状況になっています。2019年までは医療機関からの紹介数が多かったのですが、この2,3年で明らかに紹介児数も減少しています。その理由として、コロナ禍での出生児数の減少、重度難聴児については人工内耳手術を見通して手話を使わない教育、療育機関への紹介が増加、軽・中度難聴児については同様に、手話を使わない教育、療育機関への紹介が増加、このようなことが予測されます。こうした状況から、人工内耳装用児、軽・中度難聴児の教育には聴覚口話法による教育が必要と考える医師の価値観と私たち教員が将来を見通して聴力に関係なく手話を親子で早期から学ぶ支援が必要であるという価値観を擦り合わせる事が近々の課題であると感じています。今回の講座でもお話をさせていただいたように、音声で話せることは聴者の中で適応していかれるという誤解を生みました。安易なインテグレーションが進むことが再燃し、苦しむ子供たちが出てこないように、親御さんの障害認識を育む支援を重要視し、ろう学校の乳幼児教育相談で支援が開始される親子を増やしていきたいと考えています。今年度は医療機関との連絡協議会を立ち上げ、双方の立場での意見交換が行える場を設定しながら、価値観の擦り合わせの一助としていきたいと考えています。

### 過去8年間相談乳幼児数の推移



### 最近6年間 新規相談者の紹介先機関



## ② 就労家庭への支援

都立葛飾ろう学校を始め、都内のろう学校の乳幼児教育相談に通う保護者の皆様は両親就労家庭が年々増加しています。0, 1 歳児時期までは育児休暇が取れて、乳幼児教育相談に通い、情報を得て、家庭での関わりにも活かせていたのですが、育児休暇明けと共に学校に通えない、参加できるプログラムが数回と、月1の個別には来校されても、グループ活動や保護者教室、手話学習会への参加を制限せざるを得ないご家庭が多々見られます。就労は経済的な理由や自己実現というようにそれぞれの家庭の事情があり選択されるので、各家庭雄の状況を踏まえてより良い支援を模索していかなければなりません。その解決策として、コロナ禍で取り組んだ保護者教室や手話学習会のYouTube配信を可能な範囲で工夫していかれたらと思っています。各家庭で可能な時間に視聴できることで、就労家庭の親御さんの情報収集に役立てるといいかと考えています。

また、就労家庭のお子さんの幼稚部入学も大きな課題です。毎日の送迎を誰が担うのか、通学保障が解決されないことで、保育園や幼稚園に在籍して乳幼児教育相談の3~5歳児への支援(月1, 2回程度)に通うだけでは、家庭で取り組む内容の負担は大きく、お子さんの言語力によっては就学前までの言語力育成に困難が予想される例も少なくありません。久留米の「聴覚障害児支援かいじゅうの森」は、児童発達支援事業、放課後デイサービス等の取り組みとして東京都でも注目されています。こうした事業によって就労家庭のお子さんが放課後に同僚の仲間と遊び、学び合う場が校内で保障されているのは理想の取り組みです。東京で同じようなことが実現できないのは、場所の確保、担当する人の確保、予算の確保と課題は大きく、実現までには時間がかかりそうです。就労家庭のお子さんが幼稚部教育を受けられるようにするためには、こうした児童発達支援事業の実現が解決策になると思っています。実現に向けて模索していくしかないかと考えています。

## 質問2 **ロールモデルを作ることが大切とお話がありましたが、学校として行っている取り組みはありますか？**

乳幼児教育相談での取り組みを中心にお答えしたいと思います。

### ●グループ活動へのロールモデルの参加

1, 2歳児のグループでは聴者である担当者と当事者がペアで参加しています。聴者は声と手話、当事者は手話だけを使い親子に関わっています。集まりの場面での呼名、手遊び、設定遊びでは、担当者と当事者がやりとりをする場面を見せることで、会話を理解し、親子でどのように会話をしたらいいのか、モデルを示すようにしています。また、絵本の読み聞かせは基本当事者にお渡しし、手話だけでの読み聞かせを親子に体験してもらっています。聴力の軽い子供たちにとっても、「手話でわかる」力も育みたいと思っています。回を重ねるごとに、普段は音声中心の子供たちが、手話の読み聞かせが理解できるようになっていきます。こうした読み聞かせを通じて、きこえない子供たちが集中して見る、楽しめるのはどうしてなのかを親御さんたちに感じ取ってもらいたいと思っています。

また、親御さんたちには、自由遊びの時間に当事者と雑談したり、活動後の45分程度の懇談会の中で、当事者の意見を聞いたりするチャンスがあります。当事者の賢明な考え方や経験の豊かさに触れながら、親御さんは当事者を尊敬したり、対等な立場で笑い合ったりしながら「きこえない」「声で話さない」ことが人の価値と何ら関係ないことを実感していかれます。また、子供たちを前にして関わる時に視線を絶対に外さない姿や、聴者が見落とし、気づかずにいる子供たちの動きについての気づきを話してもらう中で、当事者ならではの見方、捉え方に、わが子も目の人であることを実感していきます。共に話し、活動する時間が親御さんのきこえない世界の理解を広げていっていると思います。同時に子供たちも見てわかる当事者の関わりを心から楽しんでいきます。そんなわが子の姿を親御さんが見ることで、手話の大切さを実感し、将来への安心を培っているように思います。

#### ●講演会「当事者の話を聞く会」講師

乳幼児教育相談、幼稚部保護者を対象に月1回の保護者教室を行っています。その中で年間5、6人の当事者の方々の話を聞く会を設定しています。聴力は軽度から重度まで様々、インテグレーション経験のある方、ろう学校で高等部まで育った方等教育歴も様々、学生から成人まで職業も様々というように、色々な当事者の体験談を聞き、そこからわが子の子育てのヒントを得てもらうようにしています。

#### ●手話学習会講師

乳幼児教育相談、幼稚部保護者を対象に月2～3回の手話学習会を行っています。その講師を当事者2名の方をお願いしています。2名の講師の方が、それぞれ入門、初級クラスを作り、学習会をしています。基本、声はなく、手話だけの時間です。学習会の中で、ろう文化に触れたり、講師の体験を語ったりしてくれています。親御さんにとって、ろう文化について知る貴重な機会にもなっています。

#### ●ワークショップ「マイノリティー体験」のスタッフ

年に1回、当事者の方々に「声を使わないで手話だけで話してください。」という願いをして、1グループ3～5人の当事者で雑談をしてもらい、そこに聴者である親御さんが一人だけ参加し、手話だけの会話の中でどのような思いを抱くのか、体験してもらっています。10分程度参加してもらい、数名の聴保護者の体験が終わった後で、感想、当事者への質問など出してもらい、当事者からの体験談も併せて聴くことができる学習会の場を設定しています。

聴者である親御さんが体験したことは、聴者の中で聞こえないわが子が日々体験していることと同じであることを実感してもらうことで、わが子の立場を理解してもらうことがねらいです。体験の後で、色々な当事者の話も聞きながら、障がいを理解する貴重な機会となっています。

●ワークショップ「絵本の読み聞かせ」のスタッフ

年に1回、「しゅわえもん」のスタッフ（当事者）3名程度に来校してもらい、年齢別グループに分かれて、当事者スタッフが一人ずつ入って絵本の読み聞かせを練習し、発表します。手話で読み聞かせる際にどんな配慮、工夫をすると聞こえないお子さんたちが絵本を楽しめるのか、親御さんたちが学べる貴重な機会です。

乳幼児教育相談でのロールモデルの参加についてお伝えしました。幼稚部では今年度は月に1, 2回、ロールモデルとして当事者に保育参加してもらう予定です。また、小学部以上では、これまでデフリンピック参加の当事者呼んで講演会や交流の場を設けたり、高等部では卒業生のお話を聞いてもらうような機会を設けたりしています。しかし、外部から当事者に来てもらう機会は多くはないと思います。